連載52 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（64歳・内科）

「運命の出会い」を感じた一瞬

平成15年の夏ごろ、旧知のヘルパーK子さんから在宅医療の依頼がありました。脳梗塞の後遺症で寝たきり状態にある患者さんで、糖尿病、高血圧症、褥瘡（じょくそう）、湿疹（しっしん）などの合併症がありました。ヘルパーさんが代理で薬を病院へ受け取りに行ったり、通院介助をして診察に行ったりと、患者さんもヘルパーさんも大変だったのです。

さっそく、K子さんが所属している介護事業所の女社長N.Yさんと、今後のことについて面談を行うことになりました。私より2歳年上のN.Yさんに、国策である在宅医療をする身近な「かかりつけ医」と、高度な医療を行える病院の「主治医」との役割や病診連携について説明をしました。すると、N.Yさんは県の社会保障研修の一環で北欧デンマークで勉強をしてきましたと楽しそうに話されました。その時一瞬にして私とN.Yさんは、話が通じ合い理解し合えたのでした。その後の患者さんの在宅医療支援を通して「姉弟」の関係のようになりました。そして私は彼女から、24時間365日心のこもったボランティアも含め、真の介護とは何かということを、実践の場（在宅）で教えていただくこととなるのでした。

4年後の平成19年夏ころ、N.Yさんは不幸にも進行胃がん・リンパ節転移となってしまいました。平成24年1月の看取りまで、私が「かかりつけ医」となり、国立がんセンターが「主治医」となりました。それはまるで神様が、私を「在宅医」として合格かどうか、試されているのではないだろうかと思える出来事でした。

N.Yさんの病状は、食欲がなく、全身に痛みがありました。そんな状態でありながらも、介護事業所の経営の心配や、家族へのこだわり、本人の人生観と、色々お話をされたのです。私は終始聞き役に徹しました。周囲が止めるのを聞かず、少しでも事業所で仕事をしたいと意志を貫き通すこともあって、病状を心配して困ることもありました。そんな時、点滴静注や鎮痛処置などの医療行為は簡単ではありますが、「かかりつけ医」としての一歩引いた間合いの大切さを、私に語りかけていたのかもしれません。

やがて、自宅で傾眠状態となったため、息子さんと相談をして、少量の点滴補液と在宅酸素（HOT）を使用しながらの最期となったのでした。

N.Yさんは、「在宅医」として本当に大切なことは何であるのかということを、実践的に教えてくださった大先生なのです。　合掌

私たちは、空間と時間の世界で生きていて、“現在”は認識でき、“過去”は理解できます。しかし、“未来”はその時の“想い”で決定されているのと同時に、「運命」とも出会うのです。

他人との突然の「出会い」や、死という永遠の「別れ」は、私たちに生命の尊さを教えてくれます。また、フェース・ツー・フェースで直接会って話し合ってこそ、五感と第六感で感じ合い、お互いの深い理解と強い絆が生まれるのです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 18名
（常勤6名、非常勤12名）
内科・外科専門医 15名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/